

歴史教育史研究

第9号

《論説》

1946年度から1960年度における東京都歴史教育研究会の活動に関する考察
— 設立から全国組織結成に至るまでの活動概要の検討 — 大木 匡尚

清末の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ
— 丁保書編著『蒙学中国歴史教科書』の考察 — 鈴木 正弘

《史料研究》

橘高信著「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」(1950年)
— 高校からの「社会科世界史」の主張 — 茨木 智志

1970年サンフランシスコにおける日系アメリカ人史学習の教材開発(5)
田中 泉

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く 蜷川壽恵先生

《彙報》

歴史教育史研究会

2011年

史料2：討論「世界史の基本問題」（1949年）における橘高信の発言

凡例

1. 本史料は、尾鍋輝彦編『世界史の可能性—理論と教育—』（東京大学協同組合出版部、1950年3月）の「I 世界史の基本問題」「討論」（3～136頁）の中から、橘高信の発言および関連した発言を抜粋したものである。この「討論」は1949年「盛夏」に開催された。
2. 該当箇所は、同上書の「I 世界史の基本問題」「討論」の中の「社会科世界史の教育の現状」・「いわゆる東洋史・西洋史の比率」（以上は、5～14頁）そして「世界史教育の問題」・「新制大学の入学試験問題」（以上は、129～136頁）の部分である。
3. 掲載に際しては、基本は原文のままであるが、読みやすさ等に配慮して、以下のようないくつかの編集を施した。
 - ・原文の縦書きを横書きにした。
 - ・旧字体の漢字を新字体にし、仮名文字の促音と拗音の表記は捨て仮名に改めた。
 - ・いくつかの箇所にルビを付した。
 - ・史料作成者による注記等は〔 〕で記載した。また、いくつかの脚注を付した。

世界史の基本問題

社会科世界史の教育の現状

〔中略〕

尾鍋〔輝彦〕 この（一九四九年）四月から世界史の教課目が新制高等学校に設けられましたが、文部省の方から簡単な通牒^{つうめい}があつたぐらいで、具体的な指示もなく、また日本の学界では世界史というものが研究にも、叙述にもまだあまり現れていないので、先生も生徒も非常に困っております。それでこういう会を開く意義があるわけです。実際家の代表者として文京高等学校で世界史を担当していらっしゃる橘さん、一つ現状について、問題の在るところを話して頂きたいと思います。

橘〔高信〕 では……只今尾鍋さんのお話の通り、高等学校ではこの四月から、従来の東洋史、西洋史の別がなくなりまして、新しく世界史という新教課目が行われております。その実施の現状と申しまして、私広く学校を参観したわけではありませんで、私個人の経験から類推してお話しするより仕方がございません。従って私個人の勝手な見方、判断が大部分で恐縮かと存じます。

先ず教師の側の現状から申してみたいと思いますが、本年四月文部省教科書局長から、

「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」と題する通牒が出され⁵、極く概念的にはありますが、社会科歴史学習の目標が示され、併せて単元学習が望ましいこと、教科書はまだ出来ないから、従来の『西洋の歴史（上）』を参考書として使い、教師が適当に配慮するのが望ましいこと、学習指導要領は本年度末に完成の予定であるから今までの西洋史、東洋史両篇の学習指導要領を参考にされたいことなどが要望され、我々教師はこれにそうべく努力している次第であります。ところがこの通牒をよく見れば見る程、社会科歴史の新教課程は、実際に授業をする教師自身の^{きんせき}刺激とした研究と努力と実践とによってのみなされるものであるといっているとしたか考えられないのであります。そこで私達は大いに奮起して、新生面を開かんとしていると申しますのが現状なのであります。しかし他の同僚の方達からは叱られるかも知れませんが、実のところ混乱状態にあると申すのが本当の姿でありましょう。ではどんな点で迷っているかと申しますと、社会科の一般目標にそって世界史をいかに構想するかということだと思えます。先に尾鍋さんの申されましたが、日本にはまだ学問的に世界史の研究がされていないので構想の拠り所がない、よし従来の学習指導要領西洋史篇、東洋史篇⁷が唯一の手掛りとして参考になるとしても、これらは発表されてから一・二年を出ない今、全面的に再考されねばならないようなものであって見れば余りにも心もとない代物でしかありません。

尾鍋 〔中略〕

それでは実際の授業の状況について卒直なところをお願いします。

橘 授業形態の面ではありますが、単元学習が望まれることから概説講義ではなくて、生徒達自らの学習意欲を根幹として、グループ・システムを存分に生かした自学自習を理想とするのでありますが、教壇の上に立って滔々と弁じたてるか、あるいは教科書より詳しい解説に慣れていた講壇教師は、話す側から急に聴く側、それも玉石混淆、どんな研究報告がなされないとも限らない極めて聴きづらい聴き手に廻りました。しかも前にも申しましたが、一箇年を通じての大きな構想が不備であるところから、とかく小さな問題の細かい点迄穿索しがちの数多い生徒達の相談相手になるに堪えない位みすばらしいロボットの聴き手になってしまうということがあります。勢い割合に手軽に行える講義形式の授業が懐しい。否それから抜けられないのが現状でありましょう。まして教科書の無い、しかも参考書も極めて粗末な今、生徒達はもちろん、殊に教師の建設的努力がもしなされているとしたら涙ぐましいものと思いますが、極く稀れな場合を除いてそれは絶望的でしかないといえましょう。すなわちグループ・システムは食わず嫌

⁵ 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」1949年4月11日、発教247号。

⁶ 上記通達で「西洋の歴史（上）」と記載されているが、正確には『西洋の歴史（I）』（中等学校教科書株式会社著作兼発行、1947年8月）である。

⁷ 文部省による『学習指導要領東洋史編（試案）昭和二十二年度』（中等学校教科書株式会社、1947年7月）と『学習指導要領西洋史編（試案）昭和二十二年度』（中等学校教科書株式会社、1947年10月）を指す。

いのように不安が濃いのでありましょう。しかしこの方法は世界史においては是非取入れて行かねばならぬものと私は考えております。

まだいろいろとお話し申さねばならない現状があると存じますが、生徒達の現状についてちょっと申し上げます。

生徒は、御承知のように選択によって世界史を学ぶことになっていまして、大部分の学校はそうなっていると思いますが、中には準必須教科目として、全生徒に教課しているところもあります。私の学校は二年生で世界史を準必須とし、日本史のお話しなどから総合して生徒の学習態度を総括的に申し上げますと、グループ・システムの学習形態は新制大学受験に対して不安がられる面があるようであります。

それは他の教課目の学習時間とにらみあわせて余裕が無いためもありますが、根本的な不安は入試問題は一定の基準を考えて出題されるものですが、グループ・システムで自学自習的に学んだことが、どの程度この基準に合致しているか、低いものか高いものか、不足なのか無駄なことまでやり過ぎたのか、自分で判断がつかない。それでおぼつかないというのです。だから教師がその基準に合った概説をして欲しい。適当な概説書を早く紹介して欲しいなどというのであります。教師もこれに応じて講義をしたり、手近な参考書——『世界史概観』なんかその一つとの定評があるようですが——を安直に知らせたりするらしいのであります。もっとも、世界史の学習形態は必ずしもグループ・システムだけとは申されませんので、何かしつかりした信念で講義されている方もあるとは思いますが、やはり今述べたのが実情であると思われて仕方がないのです。

現状と申しまして何をお話してよいやら面くらって大変長くまとまりませんでした。が、ざっとこんな風であります。その他何か具体的にお尋ねがございましたらおいおいお話しすることにしまして……。

いわゆる東洋史・西洋史の比率

尾鍋 東洋史と西洋史と分れておった時とどんな点が違っていますか。西洋史が中心になって東洋史が寸くつついているということにはならないでしょうか。

橘 とかくそうなりがちです。大体単元は年代を追って立てられていますので、現在何処でも初めの方だと思いますが、原始とか古代とかでは史料の関係上、西洋史が中心になっているようです。去年の教員再教育講習会の時に、尾鍋先生が東洋と西洋の分量の比率について何パーセントということをおっしゃいました。

世界史を総合的に大きく見るとすれば、それは私には納得出来ません。それでは実際、具体的にはどういう風に両者を扱うかという問題になると漠然としていて、実際には扱いかねているのです。

⁸ 東京大学史学会編（村川堅太郎・山本達郎・林健太郎著）『世界史概観』山川出版社、1949年4月。正式な「世界史」教科書が存在しない中で、準教科書や参考書として多くの支持を集めた。戦後の山川出版社の「世界史」教科書の出発点に位置する書籍である。

[中略]

遠山〔茂樹〕 何故これまでの西洋史、東洋を改めて世界史にしたかという根本の問題について文部省自身何も考えていないということが、相当大きな問題だろうと思いますね。世界史という教科目が置かれたことが学問上の結論としても、また教育上の結論としても、充分納得されたものとならないうちに出来てしまったことですね。その点が現在、実際学校で世界史の授業を展開される上に、先生方が一番困る大きな問題だろうと思いますね。

橘 その点ですが、まことにお話の通りであります。私は西洋史が主で東洋史は副次的であると考えたくないので、何故世界史にしたか云々についてはあまり触れないで、現在生徒達が見聞きする出来事がそのまま関心を世界全体に結びつけることが出来ることから、この問題を解決したらよいのではないかと思っております。

結局東洋と西洋に分かれていたのを何故一つにしたのかということは、生徒の方からいえば大した問題じゃないと思われます。

増田〔四郎〕 それについていろいろな単元の中に国史が入って来たので、東洋史は西洋史と一緒にしなければならないという問題に帰ると思います。それを選択して行く、国史と世界史とどちらを選択すればいいか、二つの疑問があるんですが、あれはうまく行きませんか。

橘 選択のことについては、前にも申し上げましたが、各学校によってまちまちで、例えば世界史は準必須科目として、二年なら二年の時に全生徒がやっているところもあります。国史の方はそれが無いようです。両方選択のところは世界史の方が多いようです。また選択の場合は学年の差別をなくしているところもありますが、そこでも世界史の方が多いようですから、結局世界史の方が多く選択されていることになります。もちろんどちらか一方選べばよいのです。

村川〔堅太郎〕 国史をやるか、世界史をやるかどちらかですか。

橘 両方やってもいいし、片方でもいいんです。

[中略]

世界史教育の問題

尾鍋 さて今迄のお話を承っていますと、要するに世界史は混沌としているということになりますが……（笑声）。これを読んで高等学校の先生や生徒がますます混乱するでしょう（笑声）。予定の時間を過ぎましたが、教育的見地から一つ橘さんから……。

橘 何と申し上げていいんですか……。やっているのが不思議だということになりそうですが……（笑声）。たとえ混沌としているのが現状であるとしても、出来るだけ早くそれから抜けきらねばならないのが私達の務めでしょうから、その為にどう考えているかをお話めたいと思います。これ迄、諸先生のお話をお聞きして感じたことですが、

学問的に突きつめて考えて参りますと混沌としてしまう。しかし社会科世界史は学問的な要請から生れたというよりは、むしろ教育的な要請から生れたと申してよいと思います。その意味で今迄のお話の中にあつたと思いますが、世界の近代化の過程を見て行くという点に中心がおかれなければならない。もう少し砕いていえば、現在及び将来に生きて行かねばならないのかということを幾分なりとも知る、私達教師はそれを知ることが援助応援してやる。そのためには現世界史の発展段階を、近代文明・近代市民がどのような筋道を通ってきたかを中心問題にすべきであると言うのであります。

尾鍋 生徒達はどんな問題について関心を持っていますか。単元学習の前の予備調査の結果を話して下さい。

橋 生徒達がどんな出来事に現在最も関心を持っているか調査してみますと⁹、表現の仕方は様々であります。二つの世界の紛争があげられます。これは彼らにとって興味ある問題であることは確かであります。どちらが本当の世界かという現在の批判眼から眺めているのですがもう少し掘り下げてみますと、何故かかる紛争が行われねばならないのか。世界を平和にして行く、戦争を無いようにするにはどうしたらよいかと考えているのだと思います。もちろん意識してこうと考えていないにしても、この点への関心は特に強くあつてよいのであります。従つて戦争を無くするため現在世界でどういうことが行われているか。国際連合は果してその力強い実現機関であるか。ということになりそうではありますが、これに対する解答は世界の近代化、すなわち民主化……国家間の民主化という方向でなされねばなりません。こういう世界の中にあつて各国の国家組織は完全な大衆の政治であるデモクラシー政治にしなければならない。そうでなくしては近代国家としての性格を満たすことが出来ない。東アジアの国々にかかる意味の国家組織をだんだんと完成させて行く道程にある。かかる意味で世界における日本の国の立場が考えられるとすれば、これまた近代民主化の過程として考えざるを得ないことになりましょう。

次に世界近代化の附随的、というよりもむしろ根幹と考えてよいと思われる問題は、経済問題とそれに伴う社会問題でありましょう。この経済的民主化の裏づけなくしては、近代化は骨抜きである。世界経済が含むこの問題がいかに解決さるべきか。すなわち民主化の線にぴったりと合致した世界経済社会機構はどんなものが望ましいか。かかる問題を解決するには、民主化という意味が再確認されねばなりません。そこでこれまでの世界の歴史全般にわたつて大衆のための社会がどんな発展をしてきたかを、じっくりと見詰める必要が出てくると思うのであります。社会科世界史はかかる意味から誕生を迫られたものと考えまして、学問的には混沌に陥るかも知れない世界史を切り拓いて行きたいと考えております。

さて次に、切り拓くための手段であります。私達教師は学問的に特定の研究法に捉われる必要はないと思います。

尾鍋 ちょっと、お話の途中ですが、もちろん学問の特定の方法に捉われる必要もな

⁹ 橋高信「世界史学習の実践―構想への段階―」(『日本歴史』第18号、1949年8月)では、1949年4月の「世界史」実施前における生徒の関心に対する調査の結果が報告されている。

ければ、またそうあってはならないですが、正しい方法は何であるかということを考えさせる必要はあります。西ヨーロッパ的民主主義や中共〔中国共産党〕の動きをはっきり区別しなければならぬと思います。近代化ということで漠然と捉えないように。

橘 元来、新制中学を経てきた生徒達は、一般社会科の教課を通じて断片的な世界史に関係ある事項を学習してきていますが、それはあくまで一般社会科として必要な範囲の知識に過ぎませんから、社会科世界史として見た場合、あちこちに空白がある。それらを手際よく埋めることも必要でありますので、必要な知識をそれぞれの場所に置いてやるべきでありますから、ある程度羅列的な方法——ちょっと意味を納得して頂き難い言葉かも知れませんが——をとることもありましょうし、もちろんそのみに終始することは望ましいことではありませんから、発展段階を見透すことの出来る方法も当然とられなければならないと思います。要は世界史の教育的要請に添うためにどんな研究方法が主で、その足りない点を補う研究法がどれであるかを教師は慎重に把握して行かねばならぬと思います。時代が真に要求する研究法がその主たる研究法であることは動かせないことと考える時、この問題は案外容易に解決されるのではないのでしょうか。

次に我々の世界史の悩みを解決してくれる忘れることの出来ないものは生徒であります。自学自習の態度を一刻も早く体得してくれることがその鍵となるのでありますが、自学自習といいましても、従来のように講義式授業に備えてのそれではなく、つまり生徒各自の自学自習の成果が教師の教えてくれるものにどれ位近いものであるか確かめるがごとき問いを教師から与えられてそれを自分がいかに解決が出来るかを試すがごとき仕方ではなくて、問題を、疑問を、切実な関心を自ら求め出して、それを自分達の力によって出来るだけ自分達の学習のみによって解決して行くやり方であります。極端にいいいますと、学習活動すべてが一種の創作活動でなければならないのであります。しかしこのような創作活動は限られた時間内になされるのですから、かなりしっかりした計画性を持たねばならない。従って何か一つの単元が定まったとしますと、その解明のために生徒自身が実現性のある計画を立てる。この問いの自己提出と、解明のための計画と、その着実な実行とが実に我々教師の悩みをほごしてくれる大きな力であります。教師はかかる力を生徒達に了得できるようにしむけねばならないと考えます。グループのものが一致協力して共同で自分達の問題を自分達の力で解いて行くことこそ、社会活動に要求される最も重大なことではないのでしょうか。

尾鍋 何か実際家を代表して、列席の学者たちに御注文はありませんか。

橘 二つばかり教師として先生方にお願ひがあるのですが……。その一つは、この座談会の始めにちょっと私が触れておいた問題で、私達教師の中でよく聞かれる声なのですが、文部省で空想しているような——あえて空想と申したいのですが——世界史が我々教師に果して出来るかということです。これは私が考えますに、学問的な世界史が成り立っていない日本で、そうした裏づけのないものは高等学校で出来るかという疑念であるとしてよいと思います。このことを私がお話しました事とは別に学殖豊かな諸先生方に充分お考え頂きたいと思うのであります。

新制大学の入学試験問題¹⁰

次に入学試験問題に関係することですが、入学試験問題が案外高等学校の世界史を成立させるかしないかに大きな影響があるということでもあります。高等学校の教師がどんなに世界史の教育的要請のあるところを掘^かんでやっておりますけれども、新制大学に当然継続する高等学校でありますから、大学の諸先生の社会科世界史に対する深い御理解がございませんと、せつかくの世界史もぶちこわしになってしまいます。思ったまま申し上げて失礼かも知れませんが、先生方が昔並みの入試問題——形はなるほど新しいものに見えましても——を出しておられますと、生徒達の学習関心はどうしてもそちらに逸れざるを得ません。それでは世界史は外部からこわされることになってしまいます。現に今年の入学試験問題を見ましても、——もちろん立派な問題も沢山ございますが、生徒達から『いわゆる社会科的世界史』をやっている大学に入れますか』といわれるような問題もまたそれ以上に多い。また他県の先生方と世界史の在り方について話し合った席上でも、「あなた方がやっておられるような仕方で、生徒達が果して入試問題を解答出来ますか」と聞かれるような問題は、よく吟味して考えますと、これは生徒の不勉強や、無知に帰せられる問題ではなく、むしろ問題の方が悪いと申してよいと思います。すなわち大学の先生方が、高等学校に課されている社会科歴史の意味のあるところを御存知無い。否、無関心でいられる。それが^(ツツ)。こんな結果を生むのではないかと思うのであります。大学の先生方が、私達教師を鞭撻^(ツツ)されて、これこれこういう点に注意せねばならないという位、積極的に援助して頂きたいとお願いいたします。では、此の辺で…。

遠山 今、橘先生のいわれた大学の先生が遅れているということ、これは相当痛い批判なんじゃないかと思うんですよ。あの保守的な文部省のいつている——いわされているという方が正確かも知れないけれど——水準にすらどうかと思う節が……（笑声）。今年の新制大学の入学試験問題にも相当首をかしげるものがあるんじゃないかと思うんですがね。

尾鍋 ここらがこの座談会の、一番聴きどころじゃないかと思いますが……。御迷惑でなければ皆さんとおきの話をして下さい（笑声）。

橘 偉い先生方が、現在の歴史はこういうやり方でなければいかんから、とおっしゃって下さればいいんですが、そういうことが無いので、あんたの歴史的な立場はどこにあるんだなどと聴かれるんですが……。これには困る場合が往々にあります。

村川 よく眷眷服膺^{リキリキリ}します（笑声）。ただ試験問題については、今年から始まった変な出題の規定を改正することを、我々は要求したいと思います。

尾鍋 では、これで一応座談会を終ることにします。（おわり）

¹⁰ 新制大学は1949年度に発足したが、新制国立大学の場合は、国立大学設置法施行の遅れにより入学試験は6月に実施されたばかりであった。学力検査では、論述式試験問題に代わる「客観主義」による問題が文部省により求められていた。